

2025年7月6日 礼拝説教要旨
 ヨハネによる福音書講解説教43「神の言葉が分かるか」
 申命記30:11～14、ヨハネ7:40～53

神さまの言葉を聞くとき、わたしたちの中に何が起こっているのでしょうか。よく「心の琴線に触れる」と言いますが、文学でも芸術でも、そこで感動したり、共感を覚えたりすることができます。神さまの言葉を聞く時も同じことが起こっているのでしょうか。その感動が信仰を引き起こすのでしょうか。しかし、御言葉は単に頭だけで聞いているのではありません。わたしたちが御言葉を聞くところはむしろ魂の部分です。神さまが命の息を吹き入れてくださった部分、神さまとつながる部分です。罪によって神さまとのつながりを失い、飢え渴いた魂に御言葉が与えられる。その時に神さまが命の息を吹き入れてくださった本当のわたしが生き始めます。わたしたちはそのことを信仰と呼んでいるのかもしれません。

ここで心に留めていただきたいのは、それは一様ではありません。反応は人それぞれです。ある人は受け入れるけれども、ある人は受け入れない。それは同じ人の中でも同じです。受け入れる時とそうでない時がある。また葛藤、搖らぎ、疑いがあります。今日のところはそういう様々な反応が記されています。まず43節には「イエスのことで群衆の間に対立が生じた」とあります。神さまの言葉を聞くことで、そこに対立、分裂を引き起こした。確かに受け入れる者とそうでない者との間には対立があるでしょう。また少し読み進めていますと祭司長たち、ファリサイ派の人たちが出てきますが、彼らには苛立ち、怒りがあります。かなり強い怒りです。イエスさまを捕まえられなかつた下役たちに対して「お前たちも惑わされたのか」(47節)と言います。またイエスさまを信じる者を「律法を知らないこの群衆は呪われている」(49節)とさえ言うのです。律法を知らない無知で愚かな人々がイエスさまの教えに影響を受けている、惑わされていると言って非難しています。これは軽蔑を含む怒りでしょう。この怒りはやがて排除に向かいます。そしてその先にはイエスさまの十字架があることは言うまでもありません。

最後のところにニコデモという人が出てきます。この人は第3章のところにも出てきました。ある夜こっそりイエスさまを訪ねてきた人です。彼は律法の教師でした。ちなみにニコデモは全部で三回出てきますが、この後イエスさまの葬りのところに出てきます。香油を塗ってイエスさまの遺体を丁重に葬ります。今日のところでニコデモはイエスさまを擁護する発言をします。早計にイエスさまを捕らえて殺してしまおうとする仲間に勇気を出して訴えたでしょう。

「我々の律法によれば、まず本人から事情を聞き、何をしたのか確かめたうえでなければ、判決を下してはならないことになっているではないか」(51節)けれどもこの発言を仲間からたしなめられて、それで黙ってしまいます。訴えを取り下げてしまう。内心はイエスさまの言葉に共感しているのだけれども、周りに流されてしまう。これもまた正直な反応なのです。そのように神さまの言葉によって、自分の中に変化が起こる。そういう本当の自分が引き出されていくのです。

そこで思い起こす聖書の言葉があります。「神の言葉は生きており、力を發揮し、どんな両刃の剣よりも鋭く、精神と靈、関節と骨髄とを切り離すほどに刺し通して、心の思いや考えを見分けることができるからです。更に、神の御前では隠れた被造物は一つもなく、すべてのものが神の目には裸であり、さらけ出されているのです。この神に対して、わたしたちは自分のことを申し述べねばなりません」(ヘブライ4:12～13)御言葉がわたしたちを刺し通して、す

べてをあらわにいたします。そして自分のことを洗いざらい告白するのです。全てをあらわにする。でもそれでよいのです。怒りや軽蔑も対立や従いたくても従えない弱さも全部イエスさまが受け止めてくださるからです。それらをすべて受け止めてイエスさまは十字架へと向かわれます。そのとおり、十字架を取り囲む人々にも様々な反応、感情がありました。イエスさまを罵り、絶望します。ユダの裏切り、ペトロの従えない弱さ、そして後悔があります。そのような人々をすべて受け止めながらイエスさまは十字架で死んでくださいました。このようにしてイエスさまがすべてを受け止め御前に執り成してくださいからこそ、わたしたちは今、神さまに御前に立ち、礼拝をささげることができます。

先ほど、ニコデモのことを取り上げました。群衆の中にはイエスさまを信じようとする人々がいる。イエスさまを逮捕しようとした下役たちもその教えに驚き、捕らえられずに帰ってきました。ニコデモは、彼らの気持ちが少なからず分かることです。だからそのような人々を無知だと愚弄し、一蹴する祭司長、ファリサイ派の人たちに反論します。律法に照らしたらあなたがたのしていることは無理がある。勇気を出して言った。でもたしなめられ、引き下がってしまう。そういう臆病なところがあるのでしょう。けれども神さまはニコデモを決してお見捨てになられません。最後に十字架の死の場面にニコデモを登場させます。「そこへ、かつてある夜、イエスのもとに来たことのあるニコデモも、没薬と沈香を混ぜた物を百リトラばかり持って來た。彼らはイエスの遺体を受け取り、ユダヤ人の埋葬の習慣に従い、香料を添えて亜麻布で包んだ」（19：39～40）

この時のニコデモは、こっそりではなく、堂々と名乗り出て、アリマタヤのヨセフと一緒にイエスさまの遺体を引き取り、丁重に埋葬します。ここにニコデモの心の変化を読み取ることができます。ある牧師はこのニコデモの変化について、「神さまが時間をかけて育て、整えてくださった」と述べています。わたしもそうだと思います。それぞれに神さまがふさわしい時を備えてくださる。パウロも言います。「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださるのは神です」（Iコリント3：6）

申命記に「御言葉はあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことができる」（30：14）とありました。何よりも御言葉を近くに、御言葉を聞くことができるようになるために、イエスさまがわたしたちのところに来てくださいました。そしてわたしたちの心を開いてくださいます。十字架とよみがえりの御業が、わたしたちの頑なな心を打ちくだき、心を開いて、神さまの御言葉を聞けるようにしてくださるのです。

天の父よ。わたしたちの心は頑なです。なかなか心を開いて御言葉を聞けないわたしたちです。だからこそイエスさまがわたしたちのところに来てくださって、十字架とよみがえりの御業によって、魂において御言葉を聞くことができるようにしてくださいました。そのことを信じて御言葉に聞き続けることができるよう導いてください。主の御名によってお祈りいたします。アーメン。